

## 特別レポート◆◇ 日本の医学生が見た MD アンダーソン

日本大学医学部 6年

伊田 英恵



私は、MD Anderson Cancer Center（以下 MDA と呼ぶ）を 2012 年 3 月 5 日から 5 日間見学いたしました日本大学医学部 6 年の伊田英恵と申します（なお、現在〔2012 年 6 月〕は研修医 1 年目をしています）。受け入れをしてくださった上野直人先生、秘書の方々、そして MDA でお世話になった先生方や職員の方々、見学させて頂きありがとうございました。今回の見学を希望したのは、[The 5th TeamOncology Workshop](#)に参加したことがきっかけでした。MDA のがん医療に魅かれ、もっと知りたいと思い今回の見学を希望いたしました。このレポートが少しでも皆様の MDA を知るきっかけとなれば嬉しいです。

### がん撲滅を掲げる MDA の巨大さ

MDA はいくつもの建物から構成されている巨大ながんセンターです。今回は主に Breast medical oncology department がある Cancer Prevention Building (CPB)、Clinic がある Mays Clinic、病棟や講堂がある Main Building を見学しました。

その他に Faculty Center や Pickens Tower などがあり、それぞれの建物はブリッジでつながっていて、患者さんはカートに乗って移動することができます。がん患者さんやその家族のステイをサポートする施設、研究などを行う建物もあります。今後も建物が追加される予定で、MDA は拡大を続けています。



MD Anderson Cancer Center のビル群。多くの建物から構成されている

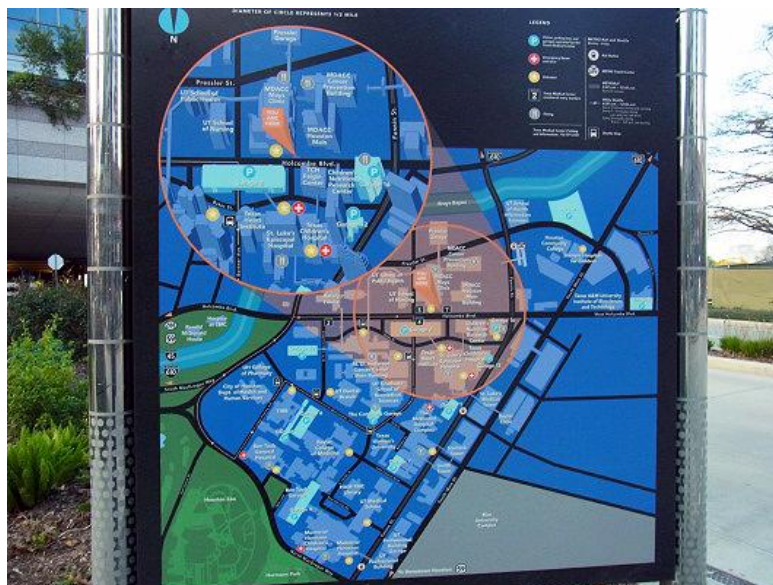
### がんを持つ患者さんへのサポート体制

MDA には患者さんをサポートする人と施設がたくさんあります。多くの従業員によって患者さんがより快適に病院で過ごせるように工夫されています。病院にはところどころに Survivor やがん患者さ

ん同士で話ができる空間があります。またMDAでは多くのSurvivorやボランティアが働いています。

そして患者さん用の図書館があり、ここで病気について調べることができます。さらには周りの景色を見渡せるスカイラウンジや、憩いの空間としてショップやカフェテリア、横になれる椅子などが用意され、一日にいくつもの科を回る患者さんのためにリラクゼーションルームも備えています。

患者さんが有意義に利用できる、こうしたAmenityがたくさんあります。このような巨大な施設とたくさんの従業員を抱えるMDAがどのように運営されているのかとても興味深く思いました。患者さんの医療費や



MD Anderson Cancer Center の案内板

ステイの援助が受けられるサポートもあるようです。

## Clinical trial と Research

MDAでは最先端の研究と多くの臨床研究が行われています。現在プロトコルの数は4800で、多くの患者さんに用いることができることが特徴の一つだと思います。がんに対して何らかのアプローチを求める患者さんにとって、参加できるtrialがあるということは、「選択できること」を意味しており、患者さんに希望を与えているといえます。このことはとても印象的でした。

Clinical trialに参加する目的で来院する患者さんも多いようです。医師は患者さんと限られた時間の中で、利用可能なtrialについて話し合いをします。そして患者さんは自分の治療のことで選択する場面が訪れます。そこで、患者さんが選択するのを医師たちが手助けする様子を見学させていただきました。EBMを含めた説明の仕方、簡潔でしかも共感をうまく表す話し方、患者さんの疑問や不安にどのように対処するのかについて、学ばせていただきました。

## いつでも、どこからでも学べる Communication skills

MDAにはコミュニケーションスキルを学習できる機関が存在し、がん患者さんに心地よい医療を提供する工夫がなされています。悪い知らせの伝え方など、がんを持つ患者さんに対するコミュニケーション方法についてインターネットで学ぶシステムがあります。

それはI\*Careという組織により運営されていて、MDAの医師たちはそれによりいつでも教育を受けることができます。また、日本国内からでもインターネットを通じてI\*Careの教育を受けることができます。実際に拝見させていただきましたが、動画による学習なのでとてもわかりやすいと思いました。



## 魅力的な Children's Art Project

MDA の中でも特に大きな Project が Children's Art Project です。この Project は、MDA に入院中の子供達が授業として絵を学んで作品を作り、それを商品として販売し、売り上げを Donation に還元するというものです。子供達は絵を通して自分を表現する場を得ることができますし、Donation がさらに子供達の生活の支援に使用されるので、教育の観点からも組織運営の観点からも合理的で、素晴らしい Project だと思いました。

子供たちが創作した絵は季節のカードや生活用品、また iPhone case のデザインに使われています。多くの人に受け入れられるよう宗教上の背景にも考慮されたデザインとなっており、インターネットや小売店で購入できるようになっています。病院で過ごす子供達が楽しく過ごせるアイデアの一つとして、私はこの Project にとても興味を持っており、身の回りで何かできないかと考え続けています。また、広範な人々に知ってもらうためのプロモーションについても学ばせていただきました。



Children's Art Project で子供達が作った作品。商品としても販売されている

## MDA の TeamOncology の実際

Hematology/Oncology Stem Cell Transplantation ICU in patient service を回診しました。Dr. Qazibash に案内していただきました。チームの構成は、Attending Dr.、Fellow Dr.、2名の APN (Advanced Practice Nurse)、pharmacist、MSW の合計 6 人でした。私もそのチームの中に加わらせていただきました。Fellow が Attending に治療上の疑問などを聞いており、Attending はその都度アドバイスをしていました。また Pharmacist が薬の使い方や、副作用の説明、適応になる薬、患者さんの状態を把握する指標について説明していました。APN が患者さんのバイタルや一般的な変化を述べて、Nurse が日常生活を説明していました。

こうしてそれぞれの役割を果たし、同時に情報を共有するのはとてもよいと思います。必要な情報がすぐに交換でき、コンセンサスがまとまりやすく、効率よくディスカッションが進められること等があると思いました。それぞれの役割を十分に発揮し、対等な立場でやり取りする場面が見られました。主張をはっきりと行い、責任を負う。そうした姿勢が感じられました。上野先生は、日本において、医師と同じくらいの能力をもつコメディカルの育成と、その責任を負うということができると指摘して

いました。

## 上野先生の研究発表会に参加して

研究内容に興味があったため、お願いをして上野先生が指導していらっしゃる研究者による発表を見学させていただきました。研究は主に三つあり、Basic Research、Translational Research、Clinical Research です。それぞれ研究をしている先生の発表の仕方や内容について参加者がディスカッションをしていました。将来研究をすることに対して、様々なアドバイスを得るきっかけになり、とても刺激的でした。



右から、MDA で研修中の医師の増田紘子先生、数学者の Natowicz 氏、そして筆者

## 最後に

MDA は最先端の治療や研究、また予防に力を入れ、新しい取り組みを続けており、言葉通りのがん撲滅を目指していると感じました。また、がんに取り組む情熱を持った医師たちと出会えた場所であるとも感じました。

日本やアメリカの違い、アメリカの中でも医療の違いがあるので比較して何かを言うことは難しいのですが、特に日本と比べて印象に残っているのは、MDA を支える沢山のひとと施設、診察スタイル、患者さんの医療的な教育とチーム医療、APN、PA の存在でした。これらは効率的、効果的、合理的なシステムによって動いていると実感しました。

そしてさらに MDA のがん医療について心に一番残っていることは、がんに関わる人々が集まって、がんを撲滅する目標の下、がん挑戦している多くの人々の姿でした。患者さんのかなりの方は世界中から MDA の評判を聞いてやって来ます。患者さんの約 4 割は海外から来る人とのことでした。出会った患者さんは MDA に大きな期待をかけて訪れていると感じました。

Clinic では何人もの辛い場面と遭遇することがありました。今回見学した患者さん一人一人が、どういう思いで MDA にやってくるのか深く考えさせられました。特に乳がんでは若年進行の場合、Dr. たちはどのように接し、話をして行くのだろうと想像していました。



MDA の乳腺腫瘍内科部門教授の上野直人先生(右)と筆者

上野先生や他の医師たちは、はっきり簡潔に、治療のオプションのことや、どういう死を迎えるのかについて話していました。また患者さんからの質問に、丁寧にわかりやすく伝えている Dr.達の姿から患者さんが安心していく様子がうかがえました。これまで一ヶ月毎、三ヶ月毎に来ていた患者さんが、次は六ヶ月毎にしようと言われてガッツポーズをしていた姿が印象的でした。この見学で遭遇した患者さんのことは今でも目に焼きついています。

がんを撲滅しようと志す MDA がどのような病院であるのか、一部ではありましたが、たくさんの出会いを通して感じることができました。これからも MDA の更なる取り組みに注目していきたいと思えます。

(2012 年 6 月執筆)